０６・迎えに来てもらったけど結局帰れなくなって、ラブホに泊まることになる

トラック０５から数時間後。
主人公とみつみ、ラブホテル『ホテル　ＮＥＷ　ブルーＵＦＯ（ユーフォー）』から『はちみつ荘』の面々とテレビ電話をしている。

あの後、主人公は即座にみつみに連絡し、驚いたみつみは自分の車を飛ばして『バァドモール』まで迎えに来てくれた。
だが、高速道路につく頃には、そこはすでに通行止めになっており……。
『このままだと、何時に帰れるかわからない』と判断した二人は、こいしかわまで戻る事をあきらめた。
そして、途中で偶然見つけたラブホテルで一泊する事にしたのだった。

今はそれを、はちみつ荘の面々に報告しているところである。
すでにメッセージアプリで状況は伝えているが、全員で顔を見ながら話した方がいいと思ったのだ。

▲　ボイス加工あり
【電話加工する】
●正面　３０センチ
〈律〉
「【主人公とみつみに話しかけている。
心配そうな優しい声で。
長時間苦労した挙句ラブホテルに入っただろう二人をねぎらっている】
もしも～し！」

〈主人公〉
「もしもお～し……」

こうしてテレビ電話は始まり、画面の向こうの律は、心配そうに優しく呼びかけてくれる。
だが、主人公の声は暗い。
当然である。
己こそが、元凶を引き起こした張本人だからだ……。

▲　ボイス加工あり
【電話加工する】
●正面　３０センチ
〈律〉
「【主人公に話しかけている。
心配そうではあるが、少し安心した様子で。
テレビ電話がつながって、二人の顔が見られたので】
お～！　お疲れお疲れ～！
ホテル入れてよかったね～！」

●正面　３０センチ
「【テレビ電話の向こうの、律、麻里、かなえに話しかけている。
とても申し訳なさそうに。
しゅんとした様子で。
まさかこうなるとは思っていなかったので】
もしも～し……。
ごめんねぇ、みんな。心配かけて……」

当然、みつみの声も申し訳なさ一色である。
主人公を迎えに行ったはずが、自分まで帰れなくなってしまった。
寮での仕事もままならないまま飛び出して来てしまったので、残る三人には急な対応を迫ってしまった。
管理人として、情けない気持ちで一杯なのだろう。
だがそれも、主人公のせいなのだが……。

▲　ボイス加工あり
【電話加工する】
●正面　３０センチ
〈律〉
「【主人公とみつみに話しかけている。
明るく励ます。
確かに急な展開に驚きはしたが、今一番困っているのは主人公とみつみであると理解しているので。
『ヤバい気した』というのは『大雪が降る気がした』という意味。
『止めれば』というのは『アルバイトに行く事を止めれば』の略】
いーのいーの気にしないっ。

無事に合流できてよかったよぉ。
今日は朝からヤバい気したんだよねぇ。
止めればよかったと、実はりっさんも後悔しておりまして……」

〈主人公〉
「いやいやりっさんは悪くないし。
わたしこそ、多大なご迷惑をおかけしまして……」

と、主人公が画面越しに深々と謝っていると、下宿生の一人である東野　麻里（ひがしの　まり）がひょっこりと顔を出した。
麻里はどの角度から見てもごりごりのギャルで少々近寄りがたい雰囲気があるが、とにかく明るく前向きで、怒ったところを誰も見た事がない。
今回の件に対しても、困惑するどころか、むしろ面白がっているようである。
律と同じように、思わぬ不幸に巻き込まれた主人公とみつみをいたわってくれる。

▲　ボイス加工あり
【電話加工する】
〈麻里〉

「【主人公とみつみ、そして律に話しかけている。
明るくあっけらかんと。
麻里は今回の出来事について『たまにはこういうハプニングも面白いよね、いい思い出じゃん』と捉えているので】
まぁまぁ。とにかく泊まるとこあってよかったじゃん♪
【主人公達が泊まっているラブホテルの名前について尋ねる】
なんだっけ、ここの名前♪」

●正面　３０センチ
「【麻里に話しかけている。
言いながら、ちょっと笑ってしまっている。
その位、このホテルは奇妙な名前なので。
全角スペース『　』ごとに、少しあける感じで】
……『ホテル　ＮＥＷ　ブルーＵＦＯ（ユーフォー）』」

みつみが半笑いで回答すると、その場にいる全員も同じ、しまりなく『にへら……』と笑う表情になる。
二人が今いるのは、郊外でしか見かけない、いかにも昔風なラブホテルだ。

このネーミングセンスからして、ずいぶん年季が入っている。

▲　ボイス加工あり

【電話加工する】

〈麻里〉

「【主人公とみつみに話しかけている。

大爆笑して。

テレビ電話から見えるホテルの部屋は、まさに『昭和のラブホテル』という感じで、令和のＪＤである麻里にとっては新鮮で面白く、そして興味深いものなので】

だははは、マジ昭和！

今時こんなとこあんだね～♪

【『この部屋に回転ベッドはあるか』という意味で聞いている】

ねぇあれある？　あれ？　回るベッド！」

●正面　３０センチ

「【麻里に話しかけている。

彼女の質問に答えるべく、スマホを動かして、ベッドが映るようにした状態で話している】

多分これ回ると思う。丸いベッド見える？」

▲　ボイス加工あり
【電話加工する】
〈麻里〉
「【主人公とみつみに話しかけている。
大爆笑して。回転ベッドが物珍しくて仕方ないので。
まだ回っていない時点で大はしゃぎしている】
おぉ～見える～！
【かなえに話しかけている。
明るく楽しげに、会話に入るように促す。
かなえは自分たちの背後にこそいるものの、まだ会話に参加していなかったので】
お～いかなえ！　かなえも見なって！」

そのうえ麻里は、すっかりこの状況を楽しんでいる。
主人公はこのお気楽さに救われつつも、同じように笑う事はできなかった。
主人公は今、みつみがはちみつ荘からバァドモールにつくまで、また、バァドモールからこのホテルにつくまでのガソリン代と高速料金。そしてこのホテル代の事を考えて憂い

ている。
みつみは『とりあえずいいから』といってこのまま全額出してくれる雰囲気だが、主人公はそれが申し訳なく、また、ふがいなくてたまらないのだ。
いっそ消えてしまいたい。
とさえ思っている。

▲　ボイス加工あり
【電話加工する】
〈かなえ〉
「【麻里に話しかけている。
『ちょっと呆れつつも、自分も興味がある』『麻里の気遣い自体は理解しており、ありがたく思っている』という感じで。
おとなしそうで、少しおっとりした、間延びした感じの声で】
もう、麻里さんったら……。
【主人公とみつみに話しかけている。
ひとまず二人に挨拶する】
こんばんは～……」

すると今度は、麻里に誘われる形でかなえが発言した。
かなえは確か、近日中にテストがある。
であるにもかかわらず、こうしてテレビ電話に出て様子を見に来てくれたのだ。
主人公の申し訳なさは、天井知らずに上昇し続ける。

●正面　３０センチ
「【かなえに話しかけている。
申し訳なさそうに。
みつみは、かなえにテストが迫っている事を知っている。
なので『おそらく勉強していただろうに、わざわざテレビ電話にくれた』という事実をまず詫びる】
あ、かなえちゃん！　勉強中ごめんね～……！」

▲　ボイス加工あり
【電話加工する】
〈かなえ〉
「【主人公とみつみに話しかけている。
『全然大丈夫です、気にしないで下さい』という感じで。

予想外の事態により苦労している二人をねぎらう。
また、かなえは優等生で、今回のテストに関しても、さほど切迫した状況ではないので】
いえいえ、お二人の事の方が大事ですので～……！
お二人とも、大丈夫ですか～？
こちらは何も問題ありませんから。
ゆっくりしていって下さいね～」

そしてこの最年少、かなえの落ち着きぶりと言ったら。
もしかなえが主人公の立場だったら、かなえはみつみを召喚するまでもなく、また、バアドモールから無理に離れる事もなく。
近隣で治安のよさそうなネットカフェや安めのホテルを見つけ、一人で宿泊手続きを済ませていそうである。
というか、主人公もそうすればよかった。
『大雪』『運休』のインパクトが強すぎて、完全に思考が停止していたのだ……。

▲　ボイス加工あり
【電話加工する】
●正面　３０センチ

〈律〉
「【主人公とみつみに話しかけている。
かなえの言葉を受けて、朝食の件を思い出したので。
それについて、心配しなくていい事をみつみに伝える】
あ、そうそう！　ご飯も大丈夫だかんね♪
明日は、あるもんでみんな適当に済ますからさ♪」

▲　ボイス加工あり
【電話加工する】
〈麻里〉
「【主人公とみつみに話しかけている。
『自分が朝食を作るから安心して』という意味で言っている】
そーそー！　麻里ちゃんモーニング作っから♪」

●正面　３０センチ
「【律と麻里に話しかけている。
感激して。
二人の心遣いがとても嬉しいので】

わー。ありがとう。助けるよー……！」

▲　ボイス加工あり
【電話加工する】
〈かなえ〉
「【みつみに話しかけている。
明日の帰り方について優しく念を押す。
かなえは『みつみが早く帰らなくてはと思うあまり、焦った運転をするのではないか』と心配しているので】
明日も雪道大変ですから、ほんとに慌てず。
安全運転で帰ってきて下さい～」

そして三人は、明日の過ごし方の算段までつけているらしい。
三人一緒に親指を立てるポーズで、テレビ電話越しに『こちらは大丈夫』とアピールしてくれる。
何と頼もしい事だろう。
それなら主人公はせめて、己が元気である事を伝えるべき所なのだが……。
お金の事で落ち込みすぎて、声が出ない。

●正面　３０センチ
「【かなえに話しかけている。
感激して。
彼女の心遣いもまた、とても嬉しいので】
そうする……。
【律、麻里、かなえに話しかけている。
感激して。
三人のお陰で、安心できたので】
みんな、ほんとにありがとー……」

▲　ボイス加工あり
【電話加工する】
●正面　３０センチ
〈律〉
「【みつみに話しかけている。
優しく、早めに休むように促す。
律は、主人公のために大慌てでこいしかわから車を走らせたみつみが疲れていないか、

心配しているので】
うんうん❤　じゃあ、疲れてるだろうからもう休みな？
今日はほんとにお疲れ様！
『はちみつ荘』の事は、りっさん達に任せとけ♪」

▲　ボイス加工あり
【電話加工する】
〈麻里〉
「【律に話しかけている。
ちょっと残念そうに。
麻里としては、もう少しテレビ電話をしていたいので】
えー？　切っちゃうの～？
ベッド回るとこ見たいんだけど～！」

〈主人公〉
「回さねーし！」

しかし、憔悴しきった主人公も、麻里がボケてくれた事で、反射的につっこみを入れる。

すると、ようやく発言した主人公を見て、三人がホッとした表情を見せた。
すっかり気を遣わせてしまっている。
なんだかいよいよ泣きたくなってきたが、今の主人公には、力なく笑う事が精いっぱいだった。

●正面　３０センチ
「【麻里に話しかけている。
明るく楽しげに。ようやく元気を取り戻した感じで】
あはは♪　後で動画で送るよ♪」

▲　ボイス加工あり
【電話加工する】
〈麻里〉
「【主人公とみつみに話しかけている。
明るく嬉しそうに。
麻里は今回の件を全く気にしていないし、二人にはこれを機に珍しい体験を楽しんで欲しいと思っているので】
やった～❤

ほんじゃおやすみ～♪
ゆっくり休めよ～♪」

▲　ボイス加工あり
【電話加工する】
〈かなえ〉
「【主人公とみつみに話しかけている。
優しくおっとりと】
おやすみなさ～い」

●正面　３０センチ
「【律、麻里、かなえに話しかけている。
ちょっと感激してうるうるしている感じで】
おやすみ～……！」

ＳＥ１　通話終了ボタンを押す音
【最初から最後まで流す】

〈主人公〉
「おやすみ！」

こうして通話は終了した。
三人は終始とても明るく優しく、主人公とみつみを案じてくれているのが見て取れた。
みつみもこれにホッとしたようで、笑顔が戻っている。

●正面　３０センチ
「【以後すべて、主人公に話しかけている。
明るく楽しげに。
下宿生たちが受け入れ、励ましてくれた事で、罪悪感がなくなったので】
あは。みんな笑ってたねぇ♪」

〈主人公〉
「うん……」

だが主人公は、みつみの言葉にうなずきつつも、まだ顔に覇気がない。
確かに三人の態度が指し示す通り、これはそこまで大変な事態ではないし、そこまで詫

び、引きずるような事でもないのかもしれない。
だが、主人公はそうはいかない。
この度は自分のせいでみんなに迷惑をかけ、特にみつみには、多大な心配をかけてしまった。
それに、ガソリン代……。
宿泊費……。
食事代、その他もろもろ……。
これらの事を思うと、主人公はぞっとする。
もしこれらを主人公がすべて支払った場合、今日のバイト代は全額消えてなくなり、それどころかマイナスになってしまう事だろう。
だが、みつみは何も言わず、全額自分が負担してくれようとしている。
はちみつ荘に残った三人だってそうだ。
こちらは金銭的な負担はそう重くなくとも、本来の予定を変更して今日明日を過ごしてもらう事になってしまった。
これらを思うと、主人公は目の前が暗くなり、ばったりと倒れそうになるのだ。

●正面　３０センチ
「【明るい声で笑いながら。

この状況を振り返る。
冷静に考えると、何だか面白くなってきたので】
だってまさか、バイトに行ったあなただけじゃなくて、迎えに行った私まで帰ってこれなくなるとか、ちょっと面白いもんねぇ」

〈主人公〉
「うん……」

そんな主人公に、みつみはすぐに気づく。
肩を撫で、優しい言葉までかけてくれる。

ＳＥ２　みつみが身体を動かす音
【最初から最後まで流す】

●正面　３０センチ
「【優しい声で、ちょっとおどけた感じで。
主人公がとても明るい気分になれないことはわかっている。
それでも、主人公を励まし、この場の雰囲気を良くしていきたいので】

……あれ。ど～した～？
気にする事ないよ？」

〈主人公〉
「うん……」

●正面　３０センチ
「【優しい声で。
『気にする事ない』といった事への根拠を述べる】
だって、あなたが悪い訳じゃないでしょう？
こんなに雪降るとか、バイト入れた時にはわかんないじゃない。
【明るく。
だが、励まそうとして、麻里が実際には言っていない事まで行ってしまう】
麻里（まり）ちゃんも言ってたじゃん。
『人生そういう事もある』って❤」

〈主人公〉
「い、言ってたっけ……」

しかし、みつみは突然の長距離運転で、やはり少し疲れているらしい。
助け舟を出そうとするあまり、麻里の発言を、実際よりも誇張して引用してしまう。

●正面　３０センチ
「【声が低くなる。
主人公の指摘が正しい事に気づいたので】
……あ。
【ちょっと『しまった』という感じで。
『人生そういう事もある』は、麻里のスタンスとしては間違っていない。
だが、お気楽な彼女も、そこまでは言っていなかったと気づいたので】
言ってなかったか。
【慌てて話題を変える。
主人公を早く元気づけたいので】
とにかくとにかく。
今日はあたしと。
この回転ベッドを楽しもうよ～♪　ねっ？」

〈主人公〉
「うう……無理……」

だから主人公は、いよいよ泣き出してしまった。
今一番疲労困憊しているのは、他でもなくみつみだ。
なのに自分はそんな彼女を、困らせる事ばかりしているからだ。

●正面　３０センチ
「【明るい声ではありつつも心配そうに。
主人公の気落ちが、いよいよ深刻だと理解したので】
……ありゃ、大丈夫？」

〈主人公〉
「無理だよぉ。気にしないとかできないよぉ。
こんだけみんなに迷惑かけてさぁ。
たくさん働いてみつみお姉ちゃんにクリスマスプレゼント買おうと思ってたのにさぁ。
車で迎えに来てもらって。泊まらせてもらう事にまでなって……。
今日のバイト代消えるくらいのお金かけてもらっちゃってるじゃん。

『私、何やってるんだろう』って思っちゃうよぉ……」

しかも、口が滑って、もうしばらく取っておくはずだった秘密まで話してしまった。
壮大なネタバレだ。
やってしまった。もう終わりである。

●正面　15センチ

「【少し驚いて。
まさかそう言った理由でアルバイトに精を出していたとは気づかなかったので】
えっ。こんなにバイトしてたのって。
クリスマスの為、だったの？」

〈主人公〉
「そうだよぉ。びっくりさせたかったのにぃ……。
全部今言っちゃったよぉ……」

●正面　15センチ

「【少し驚いて。
まさかそう言った理由でアルバイトに精を出していたとは気づかなかったので】
あらあらあら。なるほどねぇ……。
【少し間をあけてから。
※息づかい※　のみで表現する。
優しく、主人公がアルバイトにいそしむ理由がわかってホッとした感じで。
実を言うとみつみは『主人公はなぜこんなにもアルバイト漬けなのだろう』と不思議に思い、ずっと想像を巡らせては、ひそかに心配していたので】
はぁ……」

SE3　みつみが身体を動かす音2
【最初から最後まで流す】

みつみ、ホッとした勢いで、少し離れる。

●正面　30センチ
「【とても優しく。
とても安心した様子で】

そうだったんだぁ。
なんだ。なーんだ。なるほどね」

だが、やってしまった主人公に対し、みつみの反応はあまりにも意外なものだった。
絵に描いたような『ホッと胸を撫でおろす』仕草をしている。

〈主人公〉
「なーんだって、なんだよぉ……」

●正面　30センチ
「【優しく、とてもホッとした様子で。
みつみはみつみで、主人公のアルバイト漬けの生活を不思議に思っていたので】
だって『なーんだ』だもん。
『何（なん）でこんなにバイトばっかりしてるんだろう？』って、すっごい気になってたんだから」

〈主人公〉
「えっ？　えっ？　えっ？」

おまけに、その発想はなかった。
主人公は『自分はもとより働くのが好きで、周囲にも仕事好きの人物として認識されている。だから、多少アルバイトを増やしたところで、誰も気にしないだろう』と思っていたからだ。

●正面　３０センチ
「【ちょっと声が低くなる。
明るく、だが真剣な感じで。
そのせいで、かえってコミカルな感じになる。
みつみの想像はちょっとフィクションじみているにもかかわらず、みつみ自身はとても真剣なので】
いや、例えば、あたしの知らない所で、凄い借金作っちゃったとかさ。
逆に、誰かに沢山貸しちゃって、貯金ゼロになっちゃってるとか。
心配して色々考えてたんだから」

〈主人公〉
「えっ？　えっ？　その発想はないでしょうよ」

●正面　３０センチ
「【かわいく怒って。
かわいく反論する。
それだけ主人公を心配していたので】
ないなんて言いきれないよぉ。
『もし、あなたが何か相談して来たら、助けてあげなきゃ』って。
私、無駄に節約とかまでしてたんだからぁ」

〈主人公〉
「そ、そうだったの……？
ご、ごめん。心配かけて……」

すっかり風向きが変わってきた。
主人公は謝罪していたはずが、いつの間にか安心されている。

●正面　３０センチ
「【かわいく怒って。

あえて主人公の言葉をあえて繰り返し、可愛く認める】
そうだったのっ。
結構ドキドキしてたのよ？
【少し間をあけてから。
コミカルなトーンから、真面目で優しいトーンに移行する感じで】
……でも」

みつみ、近づき、主人公の右耳に話しかける。

●右　0センチ
「【優しく、真剣に。
心からお礼を言う。
主人公がこのところずっと、自分のために尽くしてくれた事がわかったので。
『すっごい』を『すっ、ごい』と強調する】
……ありがとう。
すっ、ごい嬉しいよ。
私の為に、沢山頑張ってくれてありがとう」

ＳＥ４　みつみが主人公の肩を優しく『ぽん、ぽん』と叩く音
【最初から最後まで流す】

さらに……。

みつみ、主人公に向き直る形で『右　０センチ』から『正面　１５センチ』に移動して話しかける。

●正面　１５センチ
「【優しく、しっとりと。
主人公を励まし、また、その根拠を述べる。
みつみは主人公に自信を持ってほしいので】
だからね、私はあなたの事、すごいって思ってるよ。
地元から離れて。
管理人が私とはいえ、慣れない下宿生活しながら、毎日学校行ってるだけでもすごいのに。
沢山バイトして。
自分じゃなくて、私の為に頑張ってくれててさ。

あなたはすごいよ。
あなた程自慢の恋人なんていない。
私はそう思ってるよ？」

〈主人公〉
「でも、でも……」

●正面　15センチ
「【優しく、しっとりと相槌を打つ】
うん？」

〈主人公〉
「私、早くもっと大人になって、みつみ姉ちゃんともっと対等になりたいのに」

●正面　15センチ
「【優しく、しっとりと相槌を打つ】
うん」

〈主人公〉
「でも、なれなくて。
ごめんね。ごめんねぇ……。
わたし、もっと、頼れる人になりたいのに……」

●正面　15センチ
「【ひときわ優しく、しっとりと相槌を打つ】
うん……」

主人公はいつの間にか、思いを打ち明けて涙をこぼしていた。
みつみはそんな主人公に相槌を打っていたが、やがて沈黙が流れる。
しばらくして……みつみが口を開いた。

●正面　15センチ
「【あっけらかんと明るく。
ちょっと開き直っているくらいで、一つ前とちょっとギャップがある感じで。
『今日があまりうまく行かなかった、恋人に対して、完璧な行動ができなかった』という点では、みつみも同じなので。

みつみはこの言葉を、主人公を肯定する言葉でもあり、自分自身を肯定する言葉でもある意図で言っている】

いいじゃん。たまには、うまく行かない日があるもんだよ。

それが、今日だったってだけ」

〈主人公〉

「え～……？」

その言葉に、主人公の心はほぐれていく。

みつみはすごい。

主人公一人では脱出できなかった後悔の海から、あっさりとすくいあげてくれる。

●正面　15センチ

「【明るい声から、段々しっとり優しくなっていく感じで。

優しく主人公を励ます。

また、内心自分自身にも言い聞かせている感じで】

大丈夫。いいの。

急に立派にならなくていいの。

うまくいかない時があってもいいの。
【明るくありつつも、優しくしっとりと。
主人公を励まして、前向きな気持ちにしたいので】
あなたが『失敗した』って思う時だって、私はあなたの頑張りを知ってるよ。
私がいつでも、あなたが素敵だって事を証明する。
だから安心していいんだよ。
あなたがどんなに元気になれない時でも、私はあなたの味方で。あなたの良いところを、たくさん知ってるから」

みつみ、近づいてキスする。

●正面　0センチ
「【※3回※　キスする。
優しく、触れるだけのキス】
ちゅ❤
ちゅ……ちゅ❤」

みつみ、『正面　0センチ』の距離のまま、『無声音ささやき』をする。

●正面　０センチ　『無声音』ささやき　※マークのセリフまでささやく
「【優しくしっとりと。
真剣に主人公への想いを伝える】
大好きだよ……。いつも本当にありがとうね」※

〈主人公〉
「みつみ姉ちゃ～ん！」

こうして主人公は、みつみのあまりの優しさに、とうとう泣きだした。
それを見て、みつみはきゃっきゃと笑った。

みつみ、主人公の顔を見るために、少し離れる。

●正面　１５センチ
「【きゃっきゃと嬉しそうに。
主人公がようやく深刻な状況を抜け出し、笑顔を見せたので】
あはっ❤

やっと笑った～♪

【※息づかいのみ※　で表現する。
とても嬉しそうに、ホッとした感じで息をつく】

はぁ～……❤

【とても安心した様子で】

あぁ～、よかったぁ❤

【明るく嬉しそうに。
みつみは正直なところ『折角二人でこういった場所に来られたのだから、どうせなら楽しみたい』と思っていたので】

折角二人で堂々と泊まれるのに、あなたが暗い顔してたら悲しいも～ん♪」

〈主人公〉

「……うん。そうだよね。ごめん。
みつみ姉ちゃんの言う通りだ。
滅多に来られないところにいるんだから、どうせなら楽しまなくちゃね」

●正面　15センチ

「【きゃっきゃと嬉しそうに。

主人公の言葉に同意する】
そうだよ～。
楽しも楽しも♪
【少し間をあけてから。
ちょっと声が低くなる。
ふと気づいた感じで】
……ていうか、なんかいい匂い」

〈主人公〉
「？」

●正面　15センチ
「【※鼻の呼吸※　で表現する。
主人公の匂いをかいでいる】
すんすん。すんすん。すんすん。
【少し間をあけてから。
ちょっと声が低くなる。
嬉しそうに。『いい匂い』が一体なんであるかを理解したので】

あーこれ……ここのシャンプーの匂いかぁ。
【嬉しそうに。
このホテルの良い所を述べる】
ここ古いけど、アメニティは結構いい感じだよね」

みつみ、『正面　0センチ』に近づいて、『無声音ささやき』をする。

●正面　0センチ　『無声音』ささやき　※マークのセリフまでささやく
「【優しくしっとりと。
ちょっとえっちな雰囲気に移行していく感じで】
いつもと違う匂いするのって、なんかドキドキするね……❤」※

みつみ、そのままキスする。

●正面　0センチ
「【※3回※　キスする。
優しく、触れるだけのキス】
ちゅ❤

ちゅっ❤
ちゅ❤」

みつみ、『正面　０センチ』のまま『無声音ささやき』をする。

●正面　０センチ　『無声音』ささやき　※マークのセリフまでささやく
「【優しくしっとりと。
ちょっとえっちな雰囲気に移行していく感じで】
よしよし……もう何も考えないで。
辛い気持ちや、悲しい気持ちは……」※

みつみ、『左　０センチ』に移動して、『無声音ささやき』をする。

●左　０センチ　『無声音』ささやき　※マークのセリフまでささやく
「【あえてさらっと言う事で、余計に主人公をドキッとさせるイメージで】
お姉ちゃんが全部忘れさせてあげましょう」※

ここでフェードアウトして終了。